

## 中島歌子と樋口一葉

青木 一男

### 1 はじめに

中島歌子は明治期の女流歌人であり、特に明治の中葉までは旧派の中にあつて有力な存在であつた。しかし、今日では樋口一葉の師として知られている。ちょうど、当時は通俗小説家ではあつても新聞小説家としての地位を保つていた半井桃水が、これまた一葉の小説の師、ないしは一葉の思い人として知られているのと似ている。

本稿では、①一葉が中島歌子の門に入るまでの事情と一葉にとつて歌子の歌塾（萩の舎）の意義、②中島歌子の一生、③郷土の人々の述べる歌子と母と兄、④一葉と萩の舎とのかわり——の四点から歌子と一葉について考察したいと思う。

### 2 樋口一葉の萩の舎入塾

現在、「樋口なつ 小学高等科第四級卒業候事 東京府私立青海学校」という卒業証書が残っている。これは、

明治十年（一八七七）数え年六歳。三月、本郷学校に入学。月末、退学。秋私立吉川学校に入学。

明治十一年（一八七八）数え年七歳。六月、吉川学校下等小学第八級を卒業。七級に進んだが、この年のうちに退学。

明治十四年（一八八一）数え年十歳。十一月、下谷元黒門町の私立青海学校小学二級後期に入学。

明治十六年（一八八三）数え年十二歳。十二月、同校小学高等科第四級を首席で卒業。次の第三級に進まず退学。

という、断続的な学校教育を受けた樋口一葉の最後の学歴を示す証書

である。一葉の受けた学校教育は、今日の整った学校教育からみれば、望ましいものではなかったが、当時の教育水準からすれば低いというわけではなかった。とは言うものの、勉強好きの一葉としてはつらいことであった。

後年、一葉は、

十二といふとし学校をやめけるが、そは母君の意見にて、「女子にながく学問をさせなんは、行々の為よろしからず。針仕事にても学ばせ、家事の見ならひなどさせん。」とて成き。父君は、「しからべからず、猶今しばし」と争ひ給へり。「汝が思う処は如何に」と問ひ給ひしものから、猶生れ得てこゝろ弱き身にて、いづ方にもいづ方にも定かなることいひ難く、死ぬ斗悲しかりしかど、学校は止めになりけり。それより十五まで、家事の手伝ひ、裁縫の稽古、とかく年月を送りぬ。(注2)

と回想している。当時は内福な樋口家であったから、学資に困つての中退ということではなく、一葉の言葉どおり、女の子の学校教育はほとんどにして、それよりは家庭婦人としてのしつけが大切という母の意見が勝つたのであった。

次に「小学高等科第四級卒業」ということについてであるが、従来は現在の小学校五年生の前半修了と考えるのが普通であった。これは、小学校が初等、中等、高等に分かれていたときの高等科の最下級という考え方によつていた。各科二年ずつと考えれば、その通りであるが、一葉が高等科に在学したころの制度では、初等科三年、中等科三年、

高等科二年であった。とすれば、一葉は現在の中学一年の前期を卒業——現代の言葉で言えば修了——したことになる。(注3)一葉の就学年数はおよそ四年間であったが、当時は学校制度も未熟で、学力に応じた編転入や飛び級も行われていたようであるから、こうした結果になつたのであろう。

小学校を退いた後の一葉は、母の言うまま一般の娘と同様に家事の手伝いや裁縫の稽古に日を送るようになる。数えの十三歳になると、父の知人松永政愛の妻のもとに通つて裁縫を習い始めるのであるが、こうした生活に一葉は満足できなかったし、父も娘のために何かしてやりたいという気持が強かつたのであろう。前掲の一葉の回想の続きに、

されども猶、夜ごとく机にむかふ事をすてず。父君の又、「我が為に」とて、和歌の集など買ひあたへたまひけるが、終に万障を捨て、更に学につかしめんとし給ひき。其頃、遠田澄庵、父君と心安く出入しつるまゝに、此事かたりて、「師は誰をか撰ばん」との給ひけるに、「何の歌子とかや、娘の師にて、としごろ相しりたるがあり。此人こそ」とすゝめけるに、「さらば」とて其人をたのまんとす。(下略)

とある。学問好きの娘のために父が和歌の師を探した話であるが、実はこれより先、学校を退いて間もない明治十七年の一月から二、三月にかけて、一葉は和田重雄という老人に和歌の添削指導を受けている。和田重雄はもと芝大神宮の神官で、父則義が東京府庁の社寺掛をして

いた関係で知り合った人であった。和田の指導期間は短く、かつ通信教授であつたから、一葉にとつて師という思いはほとんどなかつたかもしれない。ただ、裁縫を習いに行った松永家の主政愛は佐佐木弘綱に和歌を学んだ人だったので、一葉に和歌への情熱を持たせるうえで、何ほどの役割を果たしているかと思われる。

こうした背景の中で、父則義は一葉を和歌の師に就けようとしたのであつた。紹介者は遠田澄庵(注4)という医者だつた。澄庵は幕府の奥医師を勤めていた人であつた。「歌子」という名を聞いて、下田歌子ではないかと思ひ、知人の荻野重省を通して尋ねると、「華族女学校の学監として多忙で内弟子としては取れないから、学校のほうへ来てほしい。」との返事。後日、このことを遠田に言つと、「私の言う歌子は、下田でなく、中島と言つて、家は小石川、和歌は香川景樹のおもかげを慕い、書は加藤千蔭の流れをくむ人」と言うのだった。そして、

「おなじ歌子といふめれど、下田は小川のながれにして、中島は泉のみなもとなるべし、入学のことは我れ取とりはからはんに、何事の猶子をかしたまふ。」とて、せちにすゝむ。はじめて堂にのぼりしは、明治十九年の八月二十日成なりき。(注5)

と一葉は書いている。

こうして一葉は小石川安藤坂にあつた中島歌子の萩の舎に入門した。萩の舎は和歌の創作指導を教える歌塾であるが、和歌を作るための基礎的な古典の手ほどきもしてくれたから、日本古典文学に限つてみれば、今日の大学や短大の古典の講座に準ずるほどの勉強を一葉はして

いたかもしれない。事実、後年少数の人にはあるが、古典の教授も一葉はしている。(注6)

一葉の萩の舎における姉弟子である三宅花圃は、私が夏子(一葉女史)を初めに見たのは、歌子先生の処でした——中島歌子です。一葉さんは殆ど全く歌子にばかり学んだので、他には師と申すべき人はございません。(注7) (下略)

と書いているが、一葉にとつて萩の舎はたいせつな学校であつたといふことは事実であつた。

### 3 中島歌子について

中島歌子の誕生については不確かなところがある。塩田良平博士は、歌子は幼名とせ、江戸日本橋北鞆町に生れた。一説に弘化元年父の郷里人間郡森戸村の出生ともいふが、通説は天保十二年(一説十三年)江戸生である。父は中島又左衛門(注8)、今の埼玉県人間郡大江村の出身、彼女はその次女であつた。又左衛門は小石川伝通院前の池田利衛門の養子となつたもので、この池田は水戸藩の郷宿を営んでゐたため自然水藩との関係も深かつた。その結果であろうか、彼女は十八歳の時即ち安政五年(一説に文久元年とあるが之は一寸事実があはしない)に水藩の林忠左衛門と結婚した。(注9)

と述べ、通説を採用して、歌子(幼名、とせ)を天保十二年(一八四一)江戸の生まれとしている。しかし、明治二十五年四月二十五、六

日の両日にわたって読売新聞に発表された「歌子伝」には、

中島歌子は武蔵の郷士中島又左衛門の一女なり。弘化元年を以て入間郡森戸村に生る。襦袢の頃父母に随て江戸に出て牛込に住ひて教を家庭に受け、稍や長じて手習子家に学ぶ。此時に方て叔父中島某幕府の旗下にありて父翁の身立を計り、又歌子の鞠育を助けて中村某（故敬字氏の父）の門に入らしむ。父翁は性磊落にして交広く、水藩の藤田、戸田等は隔てぬ知己たるにより歌子を托して松平播磨守（水戸の分家）の奥へ仕へしむ。歌子此時十歳なりしも忠勤同輩に抜んで君の殊遇を受けて十五歳に及びたるに水藩の士黒沢忠三郎（桜田有志の一人）其秀節を認めて養うて甥林忠左衛門に配す。歌子時に齡十八歳なり。忠左衛門は水藩の士、祿百五十石（後に二百石となる）を領して馬廻役を勤め、号を以德と云う。（下略。——句読点は筆者）

などである。これによれば、歌子は弘化元年（一八四四）森戸村の生まれということになる。

塩田博士は「歌子伝」を著書の中で紹介までしながら、それを捨てて通説によられたが、その後、坂戸市在住の小島清氏は「『歌人中島歌子』の生年・出生地についての通説に対する疑問」という論文の中で「歌子伝」を支持し、また谷中墓地の歌子の墓の裏面に「弘化元年十二月十四日生、明治三十六年一月三十日卒」とあるのを正しいとしている。そしてさらに「明治二十五年といえは、中島歌子はなお、四十八歳……（中略）……秋の舎全盛の時期である。当時、それほどの

名士だからこそ、読売新聞はその直話を元として『歌子伝』を掲載したものであろう。その『歌子伝』を単なる一説として排除したのはどのような理由であろうか。」と塩田博士を批判している。

その後、藤井公明氏は中島歌子を詳しく研究されて、『続樋口一葉研究——中島歌子のこと——』を刊行されたが、その中で「文久元年（一八六一）とせ十八歳の時、林忠左衛門と正式に結婚したことは間違いないようである。」として「歌子伝」の記述を認めている。こうした研究の成果から、歌子は弘化元年森戸村であるという説に筆者も従いたい。なお、森戸村は明治二十二年の町村制施行により近隣の集落と合併して大家村森戸となり、昭和二十九年七月にはこの地域の中の坂戸町と周辺の三芳野・入西・勝呂・大家の四村が一つになって坂戸町となり、さらに五十一年九月からは市制が施行された。したがって、歌子の故郷は、現在は埼玉県坂戸市大字森戸となっている。

中島家は、戦国時代には地方武士集団の有力者であり、江戸時代には郷士となり、代々名主を勤めた名家であったという。藤井公明氏は太田氏の建てた越生の龍隠寺に中島家の古い先祖の墓もあるから、往時は太田氏の重臣だったのだろうと推論されている。この中島家の又右衛門が隣村戸口村の富豪福島保太郎の娘（幾子）と結婚した。これが歌子の父母である。いくは娘時代川越城の奥に仕えており、さらに福島家（屋号・網谷）の財貨が藩主一門の私生活を助けることもあって、川越松平家と福島家は深いかかわりを持っていた。その上、いくの仕えていた松平齊典夫人登世の希望をいれて齊典の落胤茂登を

又右衛門の弟文左衛門の妻に迎えることにもなっていく。この結果、中島歌子の両親は弟夫婦に家督を譲り、父は一族の中島万八家を継ぐということになる。

一方、歌子の母いくの実家福島家では、いくの父保太郎は幕府の御用達となり、苗字帯刀を許され、網谷又四郎定恒と称し、江戸での商売を始めた。それは天保十三年（一八四二）のころかと思われ、弟に家を譲った歌子の父が江戸での網谷の代表者であった。はじめは単身赴任の形で江戸と戸口・森戸を往復していた父又右衛門は、娘歌子が生れた後妻子を江戸に迎えて一家を構えたと思われる。前掲の「歌子伝」の中に叔父中島某幕府の旗下にありて、父翁の身立りしんを計り」とあったが、叔父とは川越藩主の落胤茂登を妻とした文左衛門のことであり、当時森戸村の代官——実際は代官業務の代行者だったかもしれない——であった彼は森戸村や付近の戸口村の網谷は幕府の御用達商人だったのであろう。そしてすぐ近くの戸口村の網谷は幕府の御用達商人であり、その江戸総支配人である歌子の父又右衛門の商業勢力は目ざましいものであったと想像できる。藤井公明氏は「例えば江戸の越後屋などとも、直接取引をする大商人となったものと考えられる。これが後年秋の舎歌会に、三井家夫人が出席するようになる遠因でもあった。」<sup>(注16)</sup>と指摘されている。

こうして商売が繁盛するにつれて、従来の北鞆町や揚場町の店だけは狭くなり、在方から来る人たちの宿所のことなども考えて、水戸藩の郷宿池田屋を買収し、又右衛門一家はそこに住むようになったので

ある。

中島又右衛門が池田屋を買収したのは、嘉永五年（一八五二）か六年の始めころかと思われるが、これより前の嘉永二年十一月に歌子の母いくの仕えていた川越藩主松平斉典が没し、登世が生んだ典則が襲封した。しかし、眼疾のため幕末の非常時の藩主としては適任でないとして、嘉永七年八月、水戸家から徳川斉昭の息八郎麿直侯なほちを養子に迎えて典則は隠世している。

又右衛門が水戸の郷宿池田屋を買収したことや水戸烈公の自慢の息子が川越藩主となったこと、そして池田屋の主人であるばかりか大商人としての又右衛門は水戸藩の藤田東湖・戸田銀次郎らのお歴々と親交を結ぶようになる。彼の人生でいちばん充実した気持ち味わった時期かもしれない。

安政二年（一八五五）一月、歌子の母いくの異母弟で網谷の後継者であった芳太郎が没した。翌年十一月、森戸村の文左衛門が四十一歳で亡くなった。後には川越藩主の娘であった茂登もとと又右衛門・文左衛門兄弟の老いた父母が残された。茂登は三十二歳になっていたが子はなく、相談の末歌子の兄孝三郎が森戸村へ帰って叔父の跡を継ぐことになった。その結果、江戸の中島家のほうは歌子が相続人になるという<sup>(注17)</sup>ことで、歌子は松平家の御殿女中を退いたのであった。<sup>(注18)</sup>

孝三郎が森戸へ帰ったのは安政五年も早いころで、孝三郎は二十五歳、歌子十五歳の時であった。そして、その年の暮、十二月十五に父又右衛門が四十七歳で没した。不幸は続くものである。しかし、妻の

父網谷又四郎の片腕として江戸表の仕事を支配し、水戸家の重臣たちとも親交を結び、一方歴代川越藩主の信頼を受けたという充実した人生を送ったと言える。又右衛門は嘉永四年の間屋組合の再興令により入間郡西部の絹織物売買の独占権をつかみ、さらに安政四年十二月に幕府から問屋鑑札を再び受けていたので、又右衛門の没後も歌子の母いくは父網谷又四郎の後見により夫の仕事を継承していくことができたのである。

話は少しさかのぼるが、兄孝三郎が帰郷したため松平家から下がった歌子は、安政五年九月の初めに水戸から出府してきて、池田屋をしばしば訪れていた黒沢忠三郎に見込まれて、甥の林忠左衛門の嫁にという話が出された。しかし、同年十二月には忠三郎が水戸に呼び返されるが、歌子の父も没したので、この縁談は宙に浮いた形になったかと思れるが、歌子の「枕のちり」<sup>(注19)</sup>によると十六歳ごろから忠左衛門と恋仲になり、文久元年十八歳で結婚している。

忠左衛門は歌子より四歳上で、百五十石（後に二百石）のりっぱな武士であった。黒沢忠三郎の仲介があったにせよ、恋愛から結婚へ進んだ二人の心情は幸せであつたろうが、その結婚生活は短く、波乱に富んだものであった。簡単に言えば、幕末の水戸藩内は勤皇派のいわゆる天狗党と佐幕派に分かれて対立していた。忠左衛門は天狗党に属し東奔西走していたから、新婚生活を満喫することもままならなかつたようである。そして、元治元年（一八六四）六月、水戸の内紛を鎮めるため藩主の代理として下向してきた松平大炊守の軍に忠左衛門も

加わるが、左幕派と大炊守を擁する軍との戦いになって、結局大炊守方は敗れてしまう。忠左衛門は重傷を負い、二十五の若さで自害したという。時に元治元年十月二十二日。歌子は、二十一歳であった。

敗れた大炊守は十月五日に処刑され、その軍に加わっていた者の家族にまで罪が及ぶことになる。歌子も十月五日から二か月近く獄中生活を送った後、忠左衛門の妹を伴って川越に赴いている。これは歌子の母いくが川越藩主の後室慈貞院の客として川越に滞在していたからである。間もなく江戸に帰り、義妹と暮らしながら五年経って明治を迎えた。林家の再興が許されると、義妹に嚮養子を迎え、歌子は中島家を守ったのである。

中島家の経済状態は父の死後もかなり恵まれており、母いくの世話をするくらいに用事しかない歌子は、やがて和歌の道を志し、林甕男の教えを受け、林氏の没後は加藤千浪の門人となり、明治前期を代表する女流歌人としての地位を築いている。樋口一葉が歌子に入門したころの女流歌人としては、八田知紀門下の税所敦子、加藤千浪門下の中島歌子、江戸派の鶴久子が有名であった。敦子は皇后のお歌の相手をするほどの人であり、歌子は上流・中流階級の子女を弟子にとり、久子は下町の子女を弟子にとっていた。歌子は父の代から住みなれた、いわゆる安藤坂の中ほど（小石川水道町十四番地）に萩の舎という歌塾を営んだ。ただし、生徒を集めて教える小さな学校という意味での塾というより、来宅する者には個人教授的に教えるが、鍋島家とか前田家とかをはじめとする貴族階級への出稽古をするところに特色があ

った。その外、歌会なども盛大に開かれ、発会ともなると、貴婦人や姫君たちが女中まで連れて参加するという状況であった。一葉の父の記録によると、東修一円、月謝五十銭であったというが、それは毎週土曜日に通う初心者だけで、歌会にだけ出るような人の謝礼などは、明らかではない。これは中島家が豪商であった父の代からの名残で、裕福な家と見られていたためであろう。それゆえに上流夫人・令嬢も集まってきたのであろう。

歌子は旧派の歌人であり、新しい近代歌人の出現とともに忘れられていく存在ではあったが、樋口一葉や三宅花圃の師であったということが、彼女の勲章になったと言えるかもしれない。それでも明治三十四年四月、日本女子大学校が成瀬仁蔵によって設立されると、歌子は和歌の教授として迎えられたが、病身になっていたため三宅花圃が代講していたということである。そして、明治三十六年一月三十日の明け方、歌子は亡くなった。故郷の兄とは不和であったため、肉親的には寂しい死であった。しかし、臨終の床の辺には歌の弟子である梨本宮妃伊都子殿下、鍋島侯爵夫人をはじめ名家の夫人・令嬢たちが侍ったということである。享年六十。二月一日の葬儀の折は、葬列が三町余も続き、特に従七位に叙せられている。

#### 4 郷土の人々の描く歌子一家

今から四年前、昭和六十二年の春のことである。筆者は毎年新入生

には自己紹介の文章を書かせているが、その中に「私は中島歌子の親戚です。」と書いた学生がいた。「中島歌子」と言えばだれもが知っているはずだというような書きぶりなのにまず驚いた。そしてすぐ、歌子を誇りに思っている郷土の人々がいることに感動した次第である。筆者はその学生——彼女も中島姓である——としばし歌子について話したが、彼女を通して、郷土史家によって中島家の人々について書かれた文章を読むことができた。以下、その内容を要約して紹介する。なお、これらの原文は埼玉県坂戸市教育委員会編の『坂戸人物誌——第一集——』（昭和五十五年三月発行）に収められている。

① 網谷幾子（文化十一年〜明治二十五年（一八一四〜九二））

中島孝三郎、歌子の母。戸口の豪農福島氏（あみやはその屋号）に生まれ、森戸の中島又右衛門の妻となる。長女歌子が生まれて間もなく、夫とともに江戸に出て、小石川伝通院門前であった水戸藩御用宿池田屋の加藤佐右衛門のもとに夫婦養子となって入り、<sup>（注22）</sup> 旅宿を経営していた。池田屋は水戸藩邸に近く、藩士が江戸出府の際の定宿となっており、後年歌子が同藩士林忠左衛門に嫁したのもそのためである。

安政五年十二月十五日、幾子は夫又右衛門が亡くなると、一時故郷へ戻っていたらしい。林忠左衛門が武田耕雲斎らの率いる天狗党に加わり、戦傷を負って死んだ後、歌子は夫の妹と二人で川越在の母（幾子）を訪ねている。その後再び江戸に出て、歌子とともに池田屋に近い小石川安藤坂に住み、明治二十五年六月三日没した。六月六日の野辺の送りには二百を越す人々に送られ、谷中墓地に葬られた。なお、

幾子や歌子に対して池田屋を継いだ加藤利右衛門夫妻がなにくれとなく面倒を見ていたらしいことは、一葉の日記などからもかいまみられる。(原文は岩城邦男氏)

② 中島孝三郎(天保五年〜明治四十五年(一八三四〜一九一二))  
天保五年十二月五日森戸村に生まれる。又右衛門の長子で母は福島氏。福島家は入西の戸口村で網谷と号し、江戸にまで鳴りひびいた富豪であった。妹の歌子は歌塾秋の舎の創始者で、樋口一葉の歌の師でもあった。

明治二年父の後を継いで、関東御取締寄場四十八ヶ村の大総代となつた。これは訴訟、刑罰の権を握る大役であった。その後三芳野蚕種製造組合の頭取になり、明治八年七月には第十五番学区取締官、大区内総代兼学資改正御用掛、勸業会判者、十二年には県議会議員、同二十八年四月に大家村の初代長に就任し、十有余年その職にあった。村長在任中には特に教育に熱心で、私財を投じて学舎を作り父兄たちを論じて勉学させたので、この地区に字の読めない子供たちはいなかったという。また、明治三十七、八年の戦役には募金して軍人家族や出征軍人の慰問につとめ、また軍需品や車馬の徴発等に尽力したので勲八等青色桐葉章を授けられた。明治四十五年九月十三日長逝。享年七十五歳。辞世の句「切れたこの風のまにまに消えにけり」(原文は田中治氏)

③ 中島歌子(弘化元年〜明治三十六年(一八四四〜一九〇三))  
歌人、明治初期から中期にかけて歌塾秋の舎を開き、多くの上流子

女や樋口一葉、三宅花圃らに和歌を教えた。森戸の旧家中島又右衛門、幾子夫妻の長女で、弘化元年十二月四日生まれた。幼名とせ、明治十年うた(筆名歌子)と改名している。通説は天保十二年日本橋北鞆町で生まれたとしているが、除籍簿や読売新聞の「歌子伝」の弘化元年説に従うべきだろう。幼いころ両親とともに江戸に出て、小石川伝通院前にあつた宿屋池田屋を営む父母と暮らし、父の没した安政五年に水戸藩士林忠左衛門と結婚した。この年の秋、人に伴われて水戸に下つたが、この時の模様は後年「秋の道しば」と題して綴っている。

歌子の結婚生活は辛いものだった。夫は水戸藩内の趨勢に従つて国事に奔走し、ついに天狗党に加わつて囚われの身になり、慶応元年幽死し、歌子も夫の妹でつとともに逆賊の罪を問われて獄につながれるありさまであつた。元治元年の筑波山拳兵前夜の夫婦の悲壮な別れの気持ちは「秋の寝覚め」という文章に綴られている。

夫の没後母と江戸に出て、小石川水道町十四番地、通称安藤坂に居を構え、歌人加藤千浪の門に入った。歌子が二十四、五歳のことと言う。歌の上達はめざましく、やがて同門の先輩伊東祐命を通して御歌所所長高崎正風らの知己を得、それらの人々の援助もあつて上流階級の子女に歌を教えるようになっていく。そして、明治十年ごろ安藤坂に歌塾秋の舎を開き、全盛期には門弟千人を数え、一葉が入門した明治十九年ころは、梨元宮妃、鍋島・前田侯令夫人などもその中にいた。門弟中では一葉と三宅花圃が双壁と言われ、光っていた。

明治二十四年四月、日本女子大創立と同時に和歌の教授に就任。ま



た、御歌所にも出任を求められたが、病弱のため辞退した。明治二十年代の萩の舎の動静は一葉の日記に詳しい。

老齡に入ってから病床につく日が多くなり、明治三十五年に暮れごろからは肋膜炎が進み、翌三十六年一月二十五日重体となり、神田の杏雲堂病院の入院したが、三十日に還らぬ人となった。入院中見舞いに行つた弟子たちに「なんですネそんな難<sup>むづか</sup>しい顔をしないで、賑やかにしていらつしやい。やうやくに極楽園は近づきぬいざ月はなをあくまでも見む。……」とにこにこしていたと三宅花圃（『その日その日』大正三年刊）は書いている。志士として国に殉じた夫に仕え、農民の子とし生まれながら当時の一流の人々に伍して彼女なりの実績を積んだ歌人としての自負と悟りきつた人の持つすがすがしさが感じられる。二月一日に葬儀が行われ、両親の眠る谷中墓地に葬られたが、安藤坂を出る棺を送る人々の列は三町余もあつたという。

歌子には実子は無く、明治二十二年にけいとすみの二人の養女を迎えるが、けいはその年の十一月に離縁し、すみも同じ月に養女のまま中川幡之輔と結婚している。二十七年には廉吉を養子とするが、三十四年一月に離縁している。このように家庭的には不遇だったが、歌子の遺言により中川家に嫁いだすみの三男庸が養子に入って家名を継ぎ、谷中墓地に庸が建てた「従七位中島歌子之墓」と刻んだ墓が、歌子の建てた父母の墓塔と並んで建っている。（原文は岩城邦男氏）

## 5 一葉と萩の舎<sup>はぎ</sup>

一葉樋口奈津がこの萩の舎に入門したのは、前述したように明治十九年八月二十日のことであつた。数えの十五歳、歌道の初心者として、好学心を満たすべく、歌子の教えを受けることになつたのである。

一葉がごく普通の娘であつたなら、何年か通つた後に退塾して、家庭に納まつていくはずであつた。それがそうならなかつたのは、彼女に歌才があり、師に愛されたこともあつてのことであろう。加えて、父則義の意外に早い他界と、女戸主となつた一葉が文学の世界に生きる道を求めた結果とも言える。

ここでまた、父没後の一葉の略年譜を示してみよう。

明治二十二年（一八八九）数え年一八歳。

七月十二日、父則義没。九月、母や妹と芝区西応寺町六〇番地の次兄虎之助の家に同居。

明治二十三年（一八九〇）数え年十九歳。

五月、萩の舎の内弟子として寄宿。

九月末、本郷区菊坂町七〇番地に移り、母と妹との三人での生活を始める。

明治二十四年（一八九一）数え年二十歳。

四月、半井桃水の門に入り、小説修行も始める。

明治二十五年（一八九二）数え年二十一歳。

六月三日、中島幾子没。同月十四日、歌子から桃水との絶交をすすめられる。

八月二十七日、歌子から淑徳女学校への推薦の話があった。

明治二十六年（一八九三）数え年二十二歳。

七月二十日、下谷区龍泉寺町三六八番地に転居し、荒物・駄菓子（効）の店を開く。

明治二十七年（一八九四）数え年二十三歳。

五月一日、本郷区丸山福山町四番地へ転居。文学に専心することを決意し、同月より萩の舎の助教（月手当二円）を引き受ける。

十二月、「大つこもり」発表。

明治二十八年（一八九五）数え年二十四歳。

一月より「たけくらべ」を発表し始める。

九月「にぎりえ」、十二月「十三夜」を発表。

明治二十九年（一八九六）数え年二十五歳。

一月「たけくらべ」完結。「この子」「わかれ道」発表。

十一月二十三日没。

私はこの年譜の中から中島歌子と特に関係のある三点について述べてみたい。

### ① 一葉内弟子となる

まず第一は一葉が萩の舎の内弟子となったことについてである。一葉と母と妹は父の死後、芝に別居していた次兄の家に同居するが、翌年になると姉妹は奉公口を捜して歩いた。一葉は上野公園で開かれる

内国博覧会の売り子になろうとしたこともあったという。そういった家庭事情を知って、中島歌子は一葉を内弟子として引き取ったのであった。この時のことを妹の邦子は

そのとし九月父の四十九日過後、種々の事情有て、芝西応寺町の兄の家に同居す。されど稽古のおもふやうに出来ねばあくるとし五月中島師の内弟子となる。やう少（効）より他家に多くそだし兄なればあやしきことのみ多く、為に母との間からもおもわしからで、母は病氣となる。其ことうす々々中島に語れば、されば近きわたりに家をもてよ、其知人にたのみて某女学校えいだとす、め約す。中島にいたることは五ヶ月なりけれど、このうち稽古も出来ず勝手（注29）のこのみして下女の如し。九月末つがた本郷菊坂町え家をもつ。困難いはん方なし。この中にも土曜日の稽古日は必ず手つだいにいく。（書きあつめ）

と書いている。歌子から女学校の先生に推薦してやると言われたという邦子の記憶は正確なものであったろうか。これより二年後の明治二十五年八月に萩の舎のすぐ近くにある淑徳女学校に一葉を周旋した（注30）いと歌子が語ったと一葉の日記にあるが、明治二十三年の時点では、将来女学校の先生に推薦してあげようというような意味のことを言ったのではないだろうか。結果的に女学校教師の夢は実現しなかったが、歌子が一葉に学力や人物を高く買っていたことはたしかである。そのように師からも好かれて内弟子になったものの、下女同然の扱いに驚いて萩の舎を出たと邦子は書いている。しかし、明治二十三年萩の舎に寄宿することになったことを母方の祖母に知らせた手紙には、

(前略) 私ことは去る五月中より例の歌の師匠の方へ参り居候。それかれにて度々御機げんも御伺不申上、御免し被下度候。御聞及も被為入候かこの中嶋と申は民間にての評判はあまり高からず候へど宮内省にては下田歌子と申人と一二と申うはさに御座候。夫故弟子と申はいづれも花族勅任の類のみに御座候間。私共の見聞致し候事はいづれも上等ならざるはなく我々平人のしらざる事のみにて一々驚人候。これと申も親のいたしくれ候事と有がたく覚え候。私身分は寄宿生にもこれなく奉公人にて之なく娘同様に致しくれ候間少しも心配はこれなく候間御安神願上候。(下略)

先生はもとより御隠居さまも真のまご同様の御取あつかい被下候。とあつて、中島家では一葉を養女にしたいと望んでいたようである。<sup>(注31)</sup>しかし、一葉とも仲よくしていた下女のお定が暇をとり、後が決まらぬまま、一葉に種々の負担がかかっていたのであろう。歌子の母と歌子の世話、萩の舎の来客や弟子への接待等々があれば、自分の稽古はできず、肉体的にもたいへん疲労したことであろう。しかし、ほんちに養女になるのだったら、それも苦にしてはいけないことでもあったろうと私は思うのである。しかし、養女の件は不透明のまままで仕事ばかり増え、加えて樋口家では兄と母・妹が不和で同居も続けがたく、結局は萩の舎にも近い菊坂町で女世帯を張ることになるのである。

この養女問題は、歌子にとっても重大なことであった。森戸にいる兄孝三郎は五人の子福者で、その一人を養子に迎える工作もしたが思

うように進まず、明治二十二年にけいとすみの二人を養女としたものの、けいは間もなく家を出、すみは日本橋区木石町の中川幡之輔と結婚してしまった。一葉は才能もあり人柄もよく、養女としてぜひ欲しい娘だったのである。

## ② 中島幾子死去の前夜

明治二十五年六月三日、中島歌子の母いく(幾子)が亡くなった。このあたりのことを書いた記事を一葉日記から抜粋してみよう。

(五月) 廿八日晴たり。小石川稽古に行。<sup>(注32)</sup>しかるに老人、昨夜より急病、生死おぼつかなしと聞く。「今日の稽古休み給はゞ」などいさめたれど、師の君聞給はず。終日教へをたれ給ふ。医師も来たる。「此分にては今が今にてもなかるべし」と也。おのれ、夕つ方一先帰宅。「又参らん」と也。(下略)

廿九日 早朝直に小石川病人を訪ふ。正午時まで居る。此間に小がさ原家及伊東老母、<sup>(注33)</sup>見舞に来る。一時帰宅して『九雲夢』少し写す。更に夕がたより小石川へ行く。

六月一日 中島の老君病いよくあつしとて、我を迎ひの手紙来る。参りし頃は、はや物もの給ひやらす。常はうとき師の兄君、<sup>(注34)</sup>さては其娘たちなど、枕もとに寄りつどひてすゝり啼し給ふさま、悲しともかなし、思へば廿八日の朝のことなり。咳にいたく苦しみ給ひしかば、我紙をもみて参らせたるに、病つかれし目かすかに開きて、「誰ぞや、夏どのか。我もこのたびこそは生くまじう覚ゆるよ」と物心細くの給へりしかば、「何としてさる

ことか侍るべき。み心つよふ覺せ」などなくさめし折、まだかく俄などは思はざりしをと、そゞろに我も涙ぐまれぬ。(注36)みの子ぬしも参られたり。「今日一日のうちもいかにやく」と心もとながるほどに夜にも入りぬ。医師は佐々木東洋君なれど、俄かのことのあらん時にとて、坂下なる矢鳥といふをも頼み置(注37)く也。(中略)三日の午前十時といふに空しく成りぬ。(下略)

四日 小出ぬしが催しにて桜雲台に何某の追善会ある日也。師の君の代りとして、おのれ行く。田中君と同車也。心こゝにあらねば、歌もえよめず。やがて帰る。

五日にからは柩に納めぬ。

六日の午後野辺送りの作法をす。祭主は春日何某成き。伊東夏子ぬしとおのれと、こしわきの役をなす。師君も徒歩にて砲兵工廠前まで行給ふ。これより車也。も服にやつれ給へるさま悲しともかなし。(中略)送る人は二百人に過ぎたるべし。大方は夫人、令嬢計なりき。(中略)師の君、はらから宇一君、くら子ぬしの二人、伊東君母子、みの子ぬし、おのれの八人、車をつらねて帰りつきしは日没近かりき。此人々もおのゝ家に帰るに、おのれも又、半井うしのもとより「いふ事あり」との文もあり、「今宵計は」とて帰る。(注38)

七日 「何は置いて、半井うし訪て見よ」と母君もの給ふに、ひる少し過る頃より行く。(中略)雑話さまゝにて帰る。直に小石河へ至る。こゝは只、人々酔へる様也。

(十二日) 夢の様にて十二日にも成ぬ。十日祭の式行ふ。ことに親しき十四、五人招きて小酒宴あり。伊東夏子ぬし、不図、席を立て、我に「いふべき事あり。此方」といふ。呼ばれて行しは、次の間の四疊ばかりなるものゝかげ也。「何事ぞ」と問へば、声をひそめて、「君は世の義理や重き、家の名や惜しき、いづれぞ。先この事問まほし」との給ふ。(中略)「さらば申す也。君と半井ぬしとの交際断給う訳にはいかずや、いかに」といひて、我おもて、つとまもらる。(下略)

十四日 終日倉子ぬし物語りす。是も又、我を底にやうたがふ覽、折々に侘めかしき詞ども聞ゆ。不審。今日は此人も帰られぬ。

(中略)師は物語りやんで臥床に入らばやと身を起す時也。「師の君、しばし待たせ給へや。我少し問い参らせ度こと、聞え参らせ度ことどもあり。今宵聞て給はるべき哉。はた明日になすべきにや」といふに、師の君やをら座を定めて、「何事の間ぞ。今宵聞ん」との給ふ。(中略)「其半井といふ人とそもじ、いまだ行末の約束など契りたるには無きや」との給ふ。「こは何事ぞ。行末の約はさて置いて、我いさゝかもさる心あるならず。師の君までまさなき事の給ふ哉」と口惜しきまでに打恨めば、「夫は笑か、く、眞実、約束もなにもあらぬか」と問ひ極め給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふが恨めしく、人目なくは声立てても泣かまほし。師の君さての給ふ、「実はその半井

といふ人、君のことを世に公に『妻也』といひふらすよし、さ  
る人より我も聞ぬ。おのづから縁しありて、足下にも此事ゆる  
したるならば、他人のいさめを入れるべきにも非ず。もし全く其  
事なきならば、交際せぬ方宜るべし」との給ふ（下略）。

この部分の日記には、中島幾子死去前後のことが述べられているが、  
この前後の日記までも通してみれば、一葉と半井桃水の関係のことが  
一葉としては問題なのである。それはそれとして、一葉は師の母が重  
態となるやずっと中島家に詰め看病にあたっており、病床周辺の様子、  
病人の様子も詳しく日記にとどめている。葬儀の日も中島家の人々四  
人と門弟四人（伊東夏子とその母、田中みの子、一葉）が最後の供を  
したことがわかる。

十二日と十四日の記事は、半井桃水との交際が萩の舎の中で評判と  
なり、親友の伊東夏子から忠告されたことと、師歌子からも絶交せよ  
と言われたことが綴られている。このあたりの日記の記述からは、一  
葉が萩の舎というよりは中島一族の中にあつても大切な一員であつた  
という印象すらある。そして、一葉の生活に歌子が非常に大きな力をも  
つていたことがうかがえるのである。

### ③ 萩の舎の助教となる

一葉は下谷区龍泉寺町に転居し、商業によって生計を立てようとし  
たものの、商人に徹することもできず、再び文学に専心すべく、以前  
住んでいた菊坂に近く、萩の舎にもほど近い丸山福山町に移つたのは、  
明治二十七年五月一日であつた。

これより先、三月二十七日、一葉は萩の舎を訪ねている。師の歌子  
は、当日三宅花圃が歌門を開く予定だったが、花圃の病気でお披露目  
の歌会が延期されたことを語つた後、

その序に我上をも、「いかで斯道に尽したらんには」など語る。

「我が萩之舎の号をさながらゆづりて、我が死後の事を頼むべき人、  
門下の中に一人も有事なきに、君ならましかばと思ふ」など：

話したということである。筆者は、初めてこの記事を読んだとき、一  
葉の虚言とは見なかつたが、熟年女性である歌子のおおげさな言葉と  
解釈したのであるが、愛する弟子たちとは言え、三宅花圃や鳥尾ひろ  
子などが歌門を開いて独立して行き、一抹の寂しさが歌子にはあつた  
のかもしれない。それと、中島家の後継ぎについても真剣に悩んでい  
たから、歌子の一葉に向かつての言葉は本音であつたと察せられる。  
四月に入って、歌子と一葉との間の話はいよいよ熟してきた。

中島の方も漸々歩をすゝめて、我れに後月いささかなりとも報酬  
を為して手伝ひを頼み度よし師より申こまる。「百事すべて我子と  
思ふべきつき、我れを親として生涯の事を計らひくれよ。我が萩  
之舎は則ち君の物なれば」といふに、「もとより我が大任を負ふに  
たる才なければ、そは過分の重任なるべけれど、此いさゝかなる身  
をあげて歌道の為に尽し度心願なれば、此道にすゝむべき順序を得  
させ給はらばうれし」として先づはなしはとのひぬ。此月のはじめ  
よりぞ稽古にはかよふ。

と書いている。ここでも歌子は「我れを親として生涯の事を計らひく

れよ。我が萩之舎は即ち君の物なれば」と言っている。一葉もまた歌の世界に夢があったと思われる。したがって、一葉の長兄が健在で、樋口家の経済も尋常であつたなら、一葉はすんなりと歌子の養女に納まったかとも思われる。その後、一葉は着々と小説を発表するともに、自宅でも和歌や古典や書道の弟子をもとるようになっていく。にもかかわらず、一葉は萩の舎での指導もこなしていたのである。日記のところどころに、

七日 小石川稽古日也。(明治二十七年七月)

十一月九日 はぎのや納会也。(明治二十七年)

廿日 小石川けいこ也。(明治二十八年四月)

廿七日 小石川けいこ也。(右同)

などと散見する。

明治二十九年は一葉の最晩年である。一月に『文学界』に発表してきていた「たけくらべ」が完結し、四月に『文芸倶楽部』に一括発表され、『めざまし草』の「三人冗語」で森鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨に絶賛されるに及んで、一葉の人気は最高に達した。文壇の有名人も一葉を訪れるようになっていた。一葉宅へ和歌や古典を学びに来る者もいる。こうした中であっても、萩の舎へ出講しなければという気持ちは持ち続けたのであろう。明治二十九年六月九日の日記に、

九日 中島の月次会なれど、断りいひ、ゆかざりし。三宅たつ子

ぬしよりのまれの『書簡文』、この日持参の約成しかど、え

ゆかぬなれば、博文館にたのみてかなたよりおくらす。

とある。この年の日記はきちんと書かれていないので、詳細は不明であるが、一葉が五月に書きおろした手紙の本(『通俗書簡文』)を三宅花圃に持参する約束をしていたという記述からみて、真面目に萩の舎へ通っていたことがわかる。現に前年の日記で日を追って丁寧<sup>ていねい</sup>に記述のある箇所では「小石川の会日」「小石川の稽古」「中島の会」「萩の舎の月次会」ということが並んでいる。「たけくらべ」「ごりえ」「十三夜」等の創作と並行して萩の舎の先生でもあったのである。

しかし、六月十七日の日記に

此頃たえて中島師のもとにもうです。

と書いている。このころは、すでに一葉の病状はかなり進んでいたのだが、本人はさほど重態とは思っていないかつたのか、七月二十二日まで書き続けた日記には斎藤緑雨・幸田露伴らの文人や友人知人らが訪問し、楽しく語り合ったことなどが長々と書かれている。一葉の友人の一人疋田達子は、

(前略)二十九年四月頃でした。お夏さんの咽喉がひどく腫れておりました。それでもよほど我慢してをられたようですが、八月に入ると熱が九度にも上って寝<sup>やす</sup>んでをられ、胸の病ひの常として熱のため頬が赤らみ、呼吸づかひが荒く、いかにも苦しうでした。容易ならぬ重患の様子ですから、お見舞した帰り途を中島先生へ廻<sup>まわ</sup>つて御容体をお知らせしますと、先生は「それはしやうがないねえ。」とあつさり言<sup>い</sup>つてをられます。(下略)

と回想している。<sup>(注42)</sup>明治二十八年九月「ごりえ」が発表され、いろいろ

ろと評判になるにつれ萩の舎の中でも議論の対象になり、三宅花圃らが一葉の暗い小説を非難するようになった。歌子もこれに同調し、不快に思うようになったのである。加えて、二十九年になると一葉も病気のため萩の舎を休むようになり、病氣も肺結核と知れて、歌子は一葉をうとましく思い始めたのであろう。一葉は十一月二十三日に亡くなった。萩の舎関係では中島歌子、榊原家、田中みの子、伊東夏子、三宅花圃、中村礼子、小出繁から香典が届けられた。見すばらしい葬式なので、一葉の妹邦子が会葬を遠慮したからとは言うものの、会葬したのは田中みの子と伊東夏子のみであった。

## 6 結び

中島歌子は樋口一葉の師として知られている旧派の歌人である。一般には忘れられかけている人であるが、誕生の地には中島姓を名乗る縁者が多く住んでいる。歌子の兄の後を継ぐ家もある。歌子は小石川安藤坂に住み、歌人として明治期に知られた。葬式のときは三町余の葬列が続いたことで、当時の声望を知ることができる。しかし、後継者のなかった歌子は、探しあぐねた末、弟子の中に樋口奈津という娘を見つけ、自分の後継者と考えるが、樋口家の家庭事情もあって養女とはなりえなかった。せめて歌道の補佐役にと期待し、奈津もその期待にこたえようとするが、小説家一葉への変身と病魔のいたずらが、歌子と一葉を永遠に引き離してしまったのである。

### 〔注〕

- 1 『日本近代教育百年史』（国立教育研究所編・昭和四十九年）所収の統計表によれば、明治十年から十五年までの未就学者は六〇パーセントにもなっている。
- 2 明治二十六年八月十日で終る一葉の日記「塵之中」の余白に書かれた回想文（自伝的な文章）の一節。
- 3 橋本威著『樋口一葉作品研究』（和泉書院・平成二年一月刊）第二部・四「たけくらべ」をめぐって」の中でこの考え方が示された。（なお、この部分は昭和六十一年十一月の日本近代文学会関西支部秋季大会のシンポジウムで発言されたものの記録である。）筆者も以前から近代教育の学制について調べており、橋本氏に賛成している。
- 4 明治二十二年没。享年七十一歳。（小学館版『全集樋口一葉』第三巻（日記編 二一〇ページ注による）。
- 5 前記注2の記事の末尾部分。
- 6 拙稿「一葉の弟子」（城西大学学術研究叢書7『二葉観の周辺』平成元年刊）にも述べたように、安井哲子や野々宮きく子に『源氏物語』の講義もしている。
- 7 三宅花圃「女文豪が活躍の面影」（『女学世界』明治四十一年七月発表）
- 8 歌子の父の名は、本論文では、藤井公明説（『続樋口一葉研究中島歌子のこと』桜楓社刊）により「又右衛門」をとる。なお、塩田博士編の『明治文学全集81明治女流文学集（二）』の年譜には歌子の父の名の部分を「父は中島又左衛門（又右衛門）……」としている。また、「入間郡大江村の出身」とあるのは「大家村の出身」の誤まり。
- 9 「歌子伝」、『樋口一葉研究』（中央公論社・昭和三十一年十月刊）「第二節当時の歌壇と中島歌子」所収。
- 10 『埼玉史談』（埼玉県郷土文化会発行）第三十二巻・第四号発表。桜楓社昭和五十九年六月刊。
- 11 『続樋口一葉研究——中島歌子のこと』第一章中島歌子の先祖たち。

- 13 後に入西村の大字となり、現在は坂戸市の一部。
- 14 歌子の母は川越藩主夫人（側室だが正夫人がおらず藩主に寵愛された女性）に仕えていた。
- 15 茂登は、齊典が身分の賤しい女性に生ませた娘であった。
- 16 注11と同じ。
- 17 孝三郎や歌子の祖父伴次は七十九歳、祖母りせは七十三歳であったという。
- 18 歌子は前出「歌子伝」にあるように、十歳から十五歳まで、水戸家の分家である松平播磨守の奥に仕えていた。
- 19 文久三年、歌子が二十歳のとき、夫が上京する水戸藩主を守護するために三か月ほど家を離れた。そのおりの夫の待ちわびる気持ちを綴った文章。三か月を二十日間に圧縮して、文学的にまとめている。歌子の没後、三宅花園によって遺稿集『萩のしづく』（明治四十一年三月発行）に収められた。
- 20 川越藩主松平直侯の正室（鍋島肥前守斉正の娘。貢）。二十三歳で夫と死別し、間もなく難髪した。後、鍋島家にもどって余生を過ごした。藤井公明氏は、萩の舎に対し鍋島侯爵家が後援したのも、歌子の母と慈貞院（還俗して建子）との交情に起因すると指摘される。
- 21 現在、坂戸市内の大字。
- 22 形式的には養子になっているが、実際は買収したのである。なお、東京谷中の中島家の墓地に池田屋の先代佐右衛門夫妻の墓標がある。（藤井公明『続樋口一葉研究』参照）
- 23 入西村は、明治になってから戸口村や近隣の小さな村（現在の大字）を合併してできた村。現在は坂戸市内。
- 24 「父の後を継いで」と言っても、実父又右衛門は江戸に出ていたわけであるから、この父とは実父に代って森戸の家を継いでいた叔父文左衛門をさしている。なお、文左衛門が亡くなったのは安政五年であるから、名主の職はしばらく中島家の本家が勤めていたと思われる。
- 25 この文によると宿屋が本業のような書き方であるが、実際は幅広い商業活動をしていたわけである。
- 26 安政五年結婚説は、塩田良平博士の『樋口一葉研究』（中央公論社刊）と同じ。筆者は文久元年結婚説を支持。
- 27 日本女子大の創立は、明治三十四年。
- 28 けいは、萩の舎の隣家池田屋（加藤利右衛門）の妹。明治十年生まれて十三歳。すみは、千葉県東葛飾郡五常村の田辺良作の三女。慶応元年生まれで、二十五歳。萩の舎の女中だったという。
- 29 一葉の妹邦子が書いた「樋口一葉略伝」の下書。
- 30 明治二十五年八月二十七日の記事。
- 31 一葉が龍泉寺町に転居後、久しぶりに萩の舎を訪ねたときの日記の一節にも次のようにある。「縁に出て見れば、黄白のきくのほひこまやかに、露にぬれたるけしきもなつかし。我も昔しは、こゝに朝夕をたちならして、一度はこゝの娘と呼ばるゝ計、はては此庭も、まがきも、我がしめゆひぬべきゆかりもありしを」（明治二十六年十一月十五日）
- 32 萩の舎のこと。小石川区水道町十四番屋敷にあった。
- 33 一葉の親友伊東夏子の母のぶ。のぶも萩の舎門下。
- 34 中島孝三郎。当時、歌子と不仲であったが、母が重態なので駆けつけたのである。
- 35 孝三郎の娘くらと息子宇一が来ている。
- 36 萩の舎の門人。田中みの子。一葉と親しかった。
- 37 小出祭。歌人。
- 38 半井桃水。前日、桃水から話があるから来るようにとの連絡があった。
- 39 一葉の親友。萩の舎で一葉と桃水との交際をめぐる悪評が立ったので、忠告しようとしている。
- 40 歌子の姪。孝三郎の娘。
- 41 一葉と桃水との仲を心の底で疑っているであろう（と一葉が感じているのである）。



42 『主婦の友』昭和二十二年五月号

(付記)

1 小論執筆の動機となったのは、中島歌子の一族である中島紀子嬢（本学平成元年三月卒業）との出会いであり、紀子嬢を介して歌子関係の諸資料を提供して下さった小島清氏のご配慮によって曲がりなりにも一編の小論としてまとめることができた。お二人に感謝申し上げます。

2 小論の成るにあたって、藤井公明著『続樋口一葉研究——中島歌子のこと——』に多大の学恩を得たことを記し、藤井先生にお礼を申し上げます。